

女性解放運動

中 林 幸 夫

(会員 香川県綾歌郡国分寺町)

私は自治会の役員をさせられている関係から、地区の奉仕作業には参加しなければならず顔を出す、男性の参加者は少なくほとんどが女性である。昔は男性の方が多かったのに女性ばかりになったのは女性の地位が向上したからか、それとも女性上位の社会になったからなのだろうか。

休憩のとき缶ジュースを飲みながら、

『戦後、女性は解放されましたね』

と言うと、元気のいい女性が、戦後は女性に参政権もできましたし、いろんな職場へ進出して男女同権で言いたいことも言えるようになりましたと、女性のパワーを強調する。

『私はあなたの言われる女性解放もあるけれど、家庭の主婦が解放されたことを言ったのです。例えば、以前の主婦は毎朝、他の家族より早起きしてくどの前に座って煙りを吸いながらご飯を炊かなければならなかったが、電気釜ができたおかげで、その苦勞から解放されたことを言ったのです』

『そういえば家族に弁当を持たせるために大変でした』と老女がぼつりと言うと、壮年期の女が、

『私をはじめて電気釜を買うとき、主人と二人で買いに行つたんです』

と昔を懐かしげに語る。みんなが電気釜はありがたいですねと、いろいろな思い出を語る。すると強そうな女が、電気釜もいけれど私は電気洗たく機に解放されたと、しみじみと思いを語る。

『私が洗たく機を買いたいと言つたら姑が反対しましたね、それでも私は買つたんです』

『冷たい水で洗たく板でしていたのが、これほど楽で便利なものはないと思いましたが、しばらくしたら姑が貸してくれと言いましたが、絶対に貸さなかつた』

と姑に恨みをはらすように言葉をはいた。姑たちは洗た

く板の伝統を守りたかったのか、それとも主婦の苦勞を言いたかったのか、電気製品の受入れには強い反対があつたようである。

今、家庭で使われている電気製品のほとんどは戦後に導入されたものばかりである。電気こたつの前に座つて一日中テレビの番をしている姑たちも、以前は電気製品を買うことに反対をしていた抵抗勢力であつたことをすっかり忘れている。

佐伯市に電灯会社が設立され、市内に電灯がともつたのが明治四二年。在郷浦浦まで電灯がともるまでには、数十年の歳月を要している。鶴見半島の下梶寄まで電力が供給されたのは昭和六年である。しかし、戦後の電気製品の普及には市内も市外も同時である。

NHKのテレビの放送開始が昭和二八年、大分での放送開始が昭和三四年である。当初、テレビは高額であつたため一般家庭では買えなかつたが、茶の間で現場の映像を見たいという本心から各家庭でも購入が始まり、昭和三十代年に急速に普及した。皇太子と美智子妃殿下の結婚式と東京オリンピックがテレビの購入に拍車をかけ

た。

この頃、テレビ、洗たく機、冷蔵庫が三種の神器といわれ、主婦たちは競つて家庭に備え日本の経済発展にも寄与した。これらは女の生活第一の直感的行動である。私が知っている鶴見町の婦人は今でも、この集落でテレビを一番に買ったのはうちで毎晩近所の人たちが集まつてきていたと自慢している。

戦後の電気製品の普及が家庭内の婦人を解放したことは驚くべきものがある。それに比べて男性はさほど解放されていない。冷蔵庫のおかげで冷たいビールが飲めるが、冷蔵庫のおかげで労力を軽減して恩恵を受けているのはむしろ女性ではなからうか。

女性が堅実な経済であつた頃、男たちはバブルにおどらされ、日本に不況を招く結果をもたらせてしまつた。

各家庭でも経済は主婦にまかせるのが賢明かもしれない。

電気製品の普及には地元の電気屋さんたちの努力もいかなめない。戦後の女性解放史は電気エネルギーのおかげかもしれないと思つたりもする。

明治、大正、昭和初期の家庭における電気普及史と女性解放について、なにか残しておく必要はないだろうか。

ランプの生活からはじめて電灯の光りを見た人たちの感動はあまり伝えられていない。今では電灯の明るさが何燭光という単位であつたことも忘れられている。

今また、携帯電話とパソコンが社会を大きく変えようとしている。古いことだけが歴史ではない。日々刻々と動いているものが歴史である。

学校で子供たちに洗たく板で洗たくの体験をしてもらい、昔と今の違いを知ってもらうのも歴史教育ではないだろうか。

目に見えない電気、即ち、ELECTRICを江戸時代の平賀源内らは電気と訳せずにエレキテルと呼んでいた。エレクトリックを電気と翻訳したのは中国人である。電気と翻訳せずにもし他の言葉に翻訳していたら、現在使われている電気、電気釜、電気こたつなど、電の言葉で始まる言葉はなんと表現されているか見当はつか

ない。

電流は十(プラス)から一(マイナス)に流れていることを知っている人は多いが、電子がマイナスからプラスに流れていることを知っている人は少ない。

私は島で電気の無い生活をしたが、不便なものであつた。

電気のある世の中に生まれてきた人間は幸福である。

温故知新 芽ぶく緑や 解放論

幸夫

佐伯道

羽出浦から佐伯へ行くには浦代經由と松浦經由との二つの道があつた。どちらを行くにしても、木立を經由することになる。浦代道は、鯉岡見から畑の中の小道を、帆波の上の嶺まで上る。庚申堂から稜線上を浦代道に出て左折し、帆波浦・日野浦・西野浦・竹野浦を左右に見下ろしながら、浦代の背後の嶺に達する。左に山道を下れば浦代である。西野浦や中越からは、それぞれ稜線を越えて、竹野浦と小浦に出て、浦代を經由して佐伯に行くことができる。(『鶴見町誌』)